



ABAニュース

第7号

(Association of BDP products for Agriculture)

農業用生分解性資材研究会 機関紙 (年2回発行)

編集・発行：農業用生分解性資材研究会 (略称：ABA)

事務局：東京都千代田区神田司町2-21 日本農民新聞社内

Tel.03-3233-3633 / Fax.03-3233-3666

HP <http://www.aba-seibunkai.com> / E-メール mailbox@aba-seibunkai.com

東日本大震災により被災された方々、関係の皆様にご心よりお見舞い申し上げます。
一日も早い復興をお祈り申し上げます。

今号の内容

○“農業用生分解性資材普及セミナー2010”特集

昨年11月24日、東京・港区の日本消防会館でセミナーを開催しました。当日は全国から100名を超える多くの方々にお集まりいただき、賑やかな今後の普及に向けた会となりました。今回セミナーの5つのキーワード“廃棄物・枯渇資源使用・発生炭酸ガス・重労働・コスト”の削減についてテーマを設定、廃棄物の有効利用、農業用廃プラ処理、麦藁の壁材への利用、ハウスへの太陽光利用、生分解性樹脂の車や家電・包装分野での利用を事例と共に紹介。更に、循環社会構築に向け、原料樹脂の素材の一部を植物から作った植物由来樹脂が紹介されました。今号はこのセミナーで発表された講演要旨をまとめてみました。皆様のお力添えで、普及の一助としてお役立て願えれば幸いです。



*会長挨拶

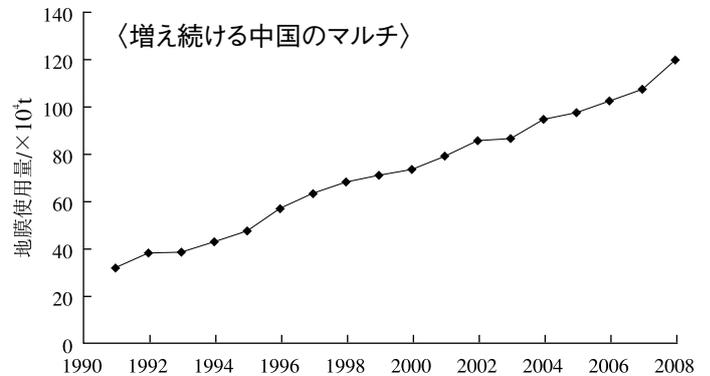
皆様のご支援のお陰を持ちまして、昨年も僅かではありますが、使用樹脂量も増え続けております。コストを下げるということで薄膜化が進み、18 μ を中心とする製品が増えました。1本当たりの樹脂使用量は減りますが、業界での使用トータル樹脂量は若干ですが増えております。売らんがための売価の引き下げが業界内でも進出してきております。2倍でなければ売れない、2倍になれば売れると煽りたてますが、商品アフターやサービスは考えず自分の所だけの都合で、都合の良い所だけをやるのは広く普及を目指す活動からは、異なるものと感じます。価格を下げることは大変重要で大いに賛成ですが、売れないという原因について今一度見直す良い機会となっております。価格が高いから売れないのではなく、商品に魅力が足りないことが一番大きな点と、商品のアピールやサービスが足りない2点であると考えます。これらの点を見直し、反省し、使用者ニーズの満足が得られる商品にすることで普及に弾みをつけてまいります。

1. 世界のマルチ状況 (株)ユニック・坂井氏

セミナー直前中国から戻られました筑波大山口先生の中国での最新情報を加えさせていただき、世界のマルチについて修正、整理し、まとめ直しました。

世界のマルチ面積は莫大ですが、その大半は中国で約 9 割です。その増え方も驚異的で（グラフ参照）、2008 年現在で日本の 125 倍、10～15 年後には、400 倍と予測されています。増え続ける面積ですが、大きな悩みがあります。コストを抑えるため極薄肉マルチが使用され、はがせず大量に土中に残ります。白い公害として生育・発芽率の低下、環境への影響が深刻化して久しく経ちますが、解決は先送りです。土中のプラスチックは増え続けています。

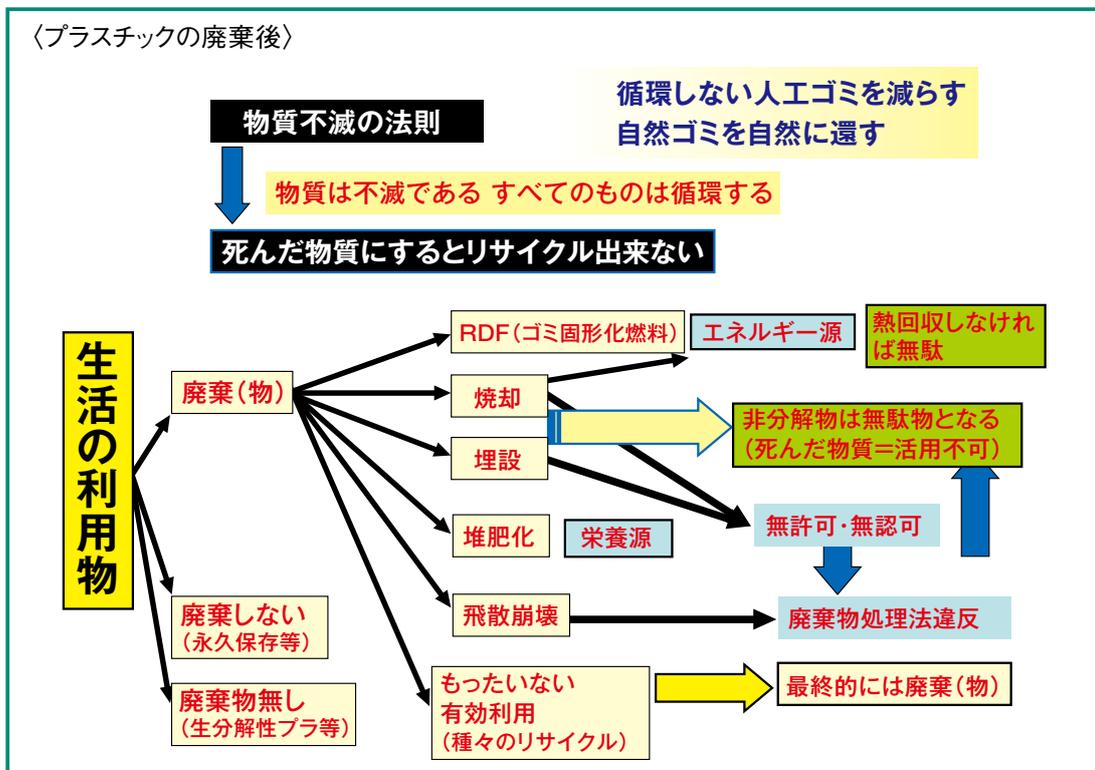
世界の生分解性マルチの利用はイタリア・ドイツ・スペインを中心にヨーロッパの利用が多く、次いで日本ですが、普及率はヨーロッパより高いです。カナダ・アメリカ地域も利用はありますが、極僅かです。その他地域での利用は有りません。ポリマルチの利点を保持し、廃棄と省力での利用はどこも一緒です。中国の動き次第で大きく変化するのはどの産業も同じです。



2. 廃プラの再資源化 (日本プラスチック工業連盟・水野氏)

農業用廃プラリサイクル (農業用フィルムリサイクル協会・麻生氏) について

廃プラの処理・リサイクルについての講演では、改めてプラスチックのリサイクルを含めた処理の難解さを勉強いたしました。莫大なエネルギーと資金が注ぎ込まれる処理負担を軽減するには、循環しない人工ゴミを減らすことが大きいと痛感しました。我々は捨ててしまえば終わり、それ以降は考えませんが、ここから始まる問題が最難関なのですね。



3. 廃棄物・エネルギーの有効利用について

(麦藁の利用：パネルホールディング・千葉氏／太陽光の利用：筑波大・山口氏)

麦藁を壁パネルに有効利用し、合板生産の森林伐採（破壊）に係わる諸事を無くす。太陽光を有効に利用し、冬季中国で無加温栽培できる温室。廃棄物・枯渇資源・CO₂・重労働・コス

トと今回のセミナーのキーワードを実現した2点の例を講演いただきました。



麦藁のパネル屋根下材

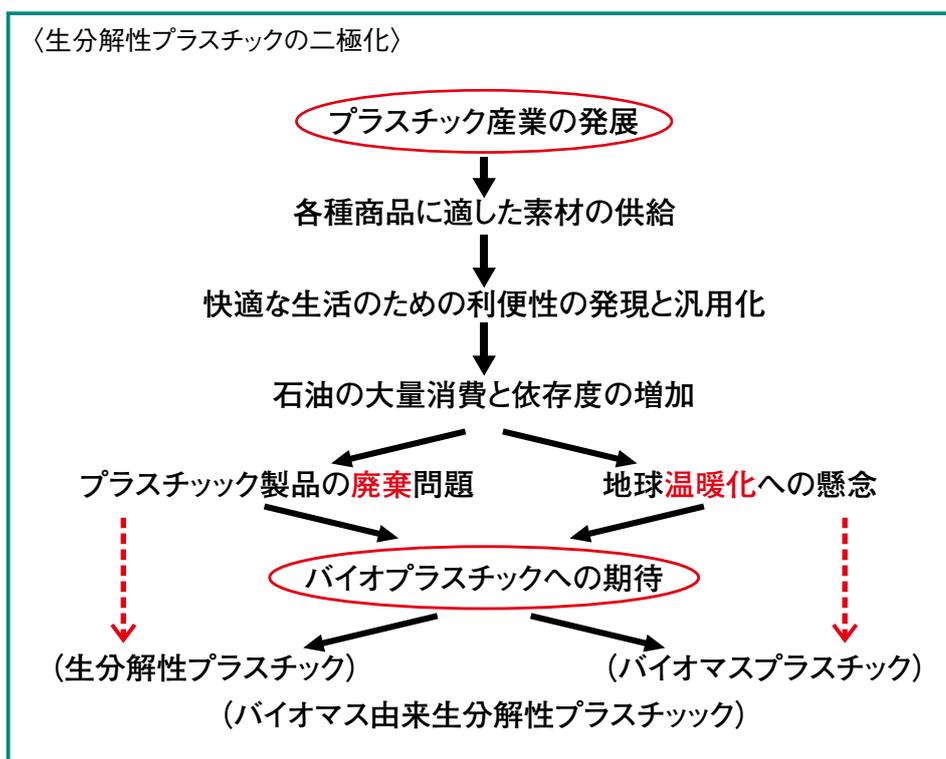


中国の太陽光利用の日光温室

4. バイオマスプラスチックのコンセプトについて

(日本バイオプラスチック協会・猪股氏、BASF・前田氏)

バイオマス（植物由来）プラスチックの登場の背景とコンセプト、事例の説明がありました。農業分野での普及推進意義や他分野での積極的な取り組み、事例が紹介され、バイオマス化を置き去りにすると大きく時代に乗り遅れる印象が残りました。枯渇資源使用の抑制、カーボンニュートラルによるCO₂の発生量削減、原油価格高騰の対応、環境循環を目的として世界から注目、期待されている次世代プラスチックです。



5. バイオマス樹脂の紹介 (ユニチカ(株)・白井氏、BASF・土山氏、(株)ケミテック・星野氏)

トウモロコシからつくるポリ乳酸、生分解性樹脂のポリマーの一部を植物からつくる植物由来生分解性樹脂が市場に登場し、マルチフィルムにも利用可能な樹脂紹介がされました。テラマック (ユニチカ)・マタービー CF (ケミテック)・エコバイオ (BASF) で、今後の生分解性マルチフィルムの組成原料の一つとして登場します。

6. ヨーロッパ生分解性プラスチックの最新の動き (株ユニック 小菅氏)

1. マルチへの利用

イタリアに於ける法規制 (ポリは 45 μ 、税金加重賦課)

EU 圏では、スペインのプラスチック公害を減らす補助金制度を代表に、既存プラスチックの後処理に向けた法規制が今後も続く状況にあり、生分解性利用への追い風が強く吹き始めた。

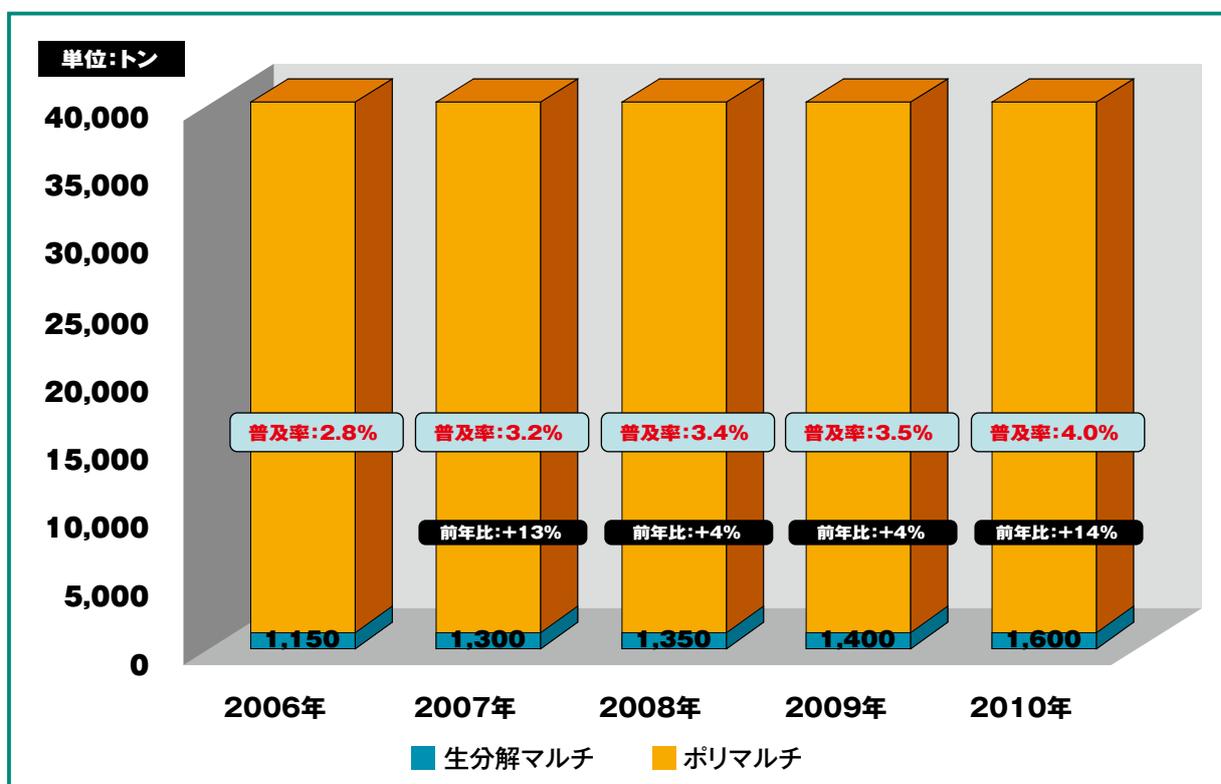
2. コンポストへの利用

各国自治体が生ゴミのコンポスト化に積極的で、その需要は底知れぬ動きが活発化を始めた。

3. まとめ

コンポスト袋を中心にマルチフィルムを含め、生分解性樹脂の利用は拡大し、現在 4 万トン以上の需要となり、樹脂生産が追い付かない状況もある。その中で、植物由来樹脂ニーズへシフトする流れが強く、原料メーカー各社が次々と新素材を市場に投入している。マルチのみと需要が限定されている日本と違い、コンポストバックを中心とした利用拡大が大きく、ヨーロッパでの樹脂利用は今後は更に大きく発展する。また、アメリカでの動きも活発で、樹脂メーカーはその市場開拓に向けても意気盛んである。

7. 生分解性マルチ使用樹脂量の動き (ABA 調査資料)



8. 講演会後のキーワード

マルチの省力は個人問題で目立ちますが、もっと大切なのは廃棄と循環は社会の最重要課題。

ABAの会員各社

■会員 (19 社)

アキレス(株)・岩谷マテリアル(株)・MKVドリーム(株)・(株)温仙堂・(株)グランツ・ケミテック(株)・KRH (株)
 (株)今野・サンテラ(株)・サンブラック工業(株)・シーアイ化成(株)・辻野プラスチック工業(株)・東海物産(株)
 日本合成化学工業(株)・BASF ジャパン(株)・三菱化学(株)・三菱商事(株)・ユニチカ(株)・(株)ユニック

■賛助会員 (5 団体)

JA 全農(生産資材部)・日本バイオプラスチック協会・全国農業資材商業会
 生研センター基礎技術研究部・(社)日本施設園芸協会